

都市における Place in Networks と 価値観に関する考察

中村優子¹・羽藤英二²

¹ 学生 非会員 東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻 (〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1)
E-mail: nakamura4@uwm.edu

² 正会員 東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻 准教授 (〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1)
E-mail: hato@bin.t.u-tokyo.ac.jp

Public Involvement (PI) や市民参加が公共政策に外挿される中で、都市・土木計画は従前の物的環境を設計する行為から「場」の総合的なデザインへの転換を迫られている。本研究ではまず、「場」を取り巻く概念を整理し、空間/社会ネットワークで記述できる場を place in networks として定義する。その上で場の意味をアイデンティティの維持管理と仮定し、場への参加における意思決定の構造を理解する手がかりとして、個人の場に対する価値観が場を通じた体験や他者との関わりにおいて変化することに注目する。本稿ではその価値観の外生的な行動変量として場に対する語りとして表出する言語データを考え、実験的調査により取得した3種類の言語データの解析を通して、場に対する価値観の変化について検討する。

Key Words: *place in networks, social network, spatial network, identity, text analysis*

1. 研究の背景

PI (Public Involvement) や市民参加が公共政策に外挿される中で、都市・土木計画は従前のように物的環境を設計するのみでは成立しなくなってきた。これに対して主に欧米諸国においては場作り (placemaking) が注目され、Project for Public Spaces (PPS) 等を中心に活動が行われている。Schneekloth & Shibley (1995)¹⁾ によって「人間が、自身が単に居る場所を生活する場所へと変質させていく方法」と説明される placemaking は日本でも試行され始めている (e.g., 三友ほか, 2009²⁾)。加えて、日本建築学会によって「まちの居場所」(日本建築学会編, 2010³⁾) という書籍がまとめられていることから、都市における場や場所をデザインするという行為が注目されていることは明らかであろう。

しかし、将来的に場のデザインを制度や設計計画の中に組み込んでいくためには、事例の収集と適用に留まらず、場とは何か、場の意味とは何かということが根本的に問い直されるべきであろう。この問題意識に基づき、本研究ではまず、「場」とその意味を取り巻く概念の整理を行った上で、場への参加における意思決定の構造を理解するために、個人

の場に対する価値観が空間や社会との相互作用において変化することに注目する。本稿では場に対する価値観を観測するための手法を提案し、実験的調査で取得されたデータの分析を試みる。

2. 場と場の意味に関する概念の整理

(1) 場の概念：語義と既往研究から考える

大辞泉(2006)によれば「場【ば】」という語(名詞)には9つの意味がある。その中で、「ある事が行われる所」といった定義に代表される物理的な概念と、「ある事が行われている所の状況。また、その雰囲気」といった定義に代表される非物理的な概念が共存している。また、英語の place という語についても同様の状況がある (Cambridge 英英辞典, 2003)。このような「場」という語の多義性は、例えば「私の居場所がない」という文章の意味を考えてみるとさらに明確になるだろう。この文章は文脈に依って、「私が身を置く空間的な場所が足りない(狭い)」という意味にも、「私が身を置く社会的な場所がない(立ち位置・役割が曖昧である)」という意味にも解釈が可能である。

学術的には発達心理学や教育心理学の分野におい

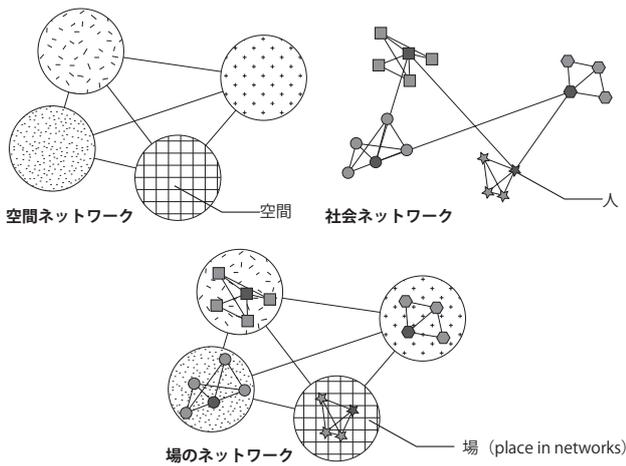


図-1 空間ネットワークと社会ネットワークで記述できる場 (place in networks).

て、研究テーマの一つとして成立している「居場所」という概念について様々な解釈と考察が行われてきた。石本 (2009) ⁴⁾ はこれらの解釈と定義を網羅的に概観し今後の研究課題についてまとめる中で、心理学における居場所の考察は居場所を他者との関係性や繋がりとして捉えるものが中心であることを指摘している。前述の語義的な考察と併せて考えれば、場という概念にとって、空間、社会という要素の重要性が示唆される。

以上の議論に基づき、場を空間、社会という2つの要素で記述できると仮定し、本研究では場のデザインを「空間」と社会関係を変容させうる「プログラム」をデザインする行為と捉える。空間、社会は共にネットワークとして記述できることが知られているため、空間ネットワーク (spatial networks) と社会ネットワーク (social networks) の組合せで記述できる場を特に place in networks として定義する (図-1)。

(2) 場の意味：場への参加動機から考える

前節で述べたように place in networks (場) を place in social and spatial networks と捉えるとき、場への参加はある社会ネットワークと空間ネットワークへの接続を意味する。社会ネットワーク上のノードは個人を、リンクは人間の関係性を表象し、空間ネットワーク上のノードは分節化されたある空間を、リンクはその空間の関係性を表象する。このような考え方に基づけば、社会ネットワーク自体が意味するのは関係性によって繋がったコミュニティの束であり、空間が意味するのは分節して記述された都市空間そのものである。従って、place in networks に接続することは都市におけるある空間に強く結びついた他者の集団の一端に接続すること

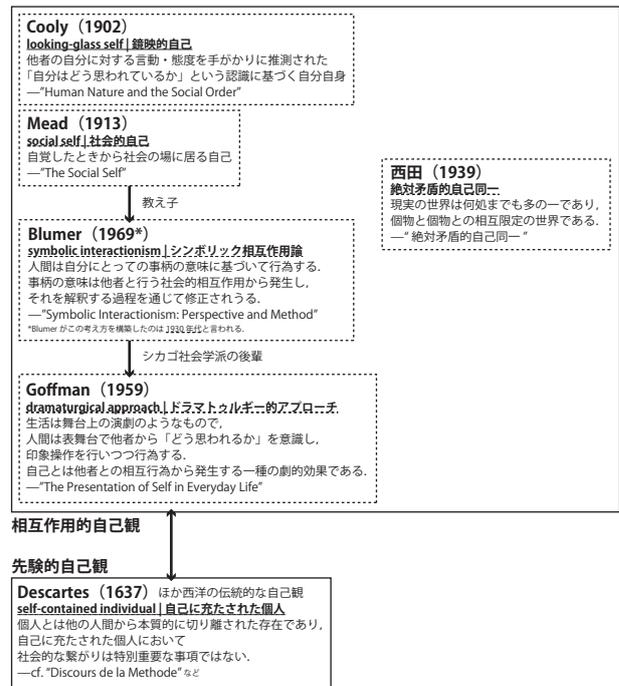


図-2 自己に関する既往研究の整理。

であると解釈できる。

ここで、他者とその繋がり束の一端に接続する「私 (自己)」とはどのようなものかを考えておく必要がある。自己性 (selfhood) も場と同じく、これまで様々な形で議論されてきた。まず、生まれながらにして個人が自己で充たされている (self-contained) という考え方に基づけば、個人 (individual) とはそれ以上分かつことができないもの (in-dividual) として認識され得るだろう。しかし、生活の中での実例をいくつか想起してみれば、個人の自己が絶対的で不変のものであるという考え方に与することは難しい。例えば、様々な状況で他者と相対しているとき、それぞれの自己が完全に同一かということを考えてみればよい。研究室で指導教官と接するときの「私」と、カフェで友人と下らない話に興じるとき「私」とは、違った価値の規範に基づいて行動しているように思われる。

このような相対的な自己観は、欧米では Cooly (1902) ⁵⁾ や Mead (1913) ⁶⁾ に始まり Blumer (1969) ⁷⁾ や Goffman (1959) ⁸⁾ によって社会学的相互作用論の文脈で議論されてきた。日本においては、独自の思想を展開した西田 (cf. 小坂, 2008 ⁹⁾) が「私」の中に他との相互作用の中で弁証法的に移ろう自己を認めた (図-2)。そして、相互作用的自己観に基づくと、石田 (1992) ¹⁰⁾ が言うようにアイデンティティは自給できず、他者と相対する中で供給される財と捉えられ、コミュニティ即ち他者とその関係性の束への接続は、アイデンティティの維持管理と

いう役割を果たすと言える。

本研究では以上のような議論に基づき、相互作用的分節化する自己を下敷きにし、場に接続する動機をアイデンティティの維持管理と仮定する。

(3) 場に対する価値観：価値の表現を考える

本稿では、場の意味が「アイデンティティの維持管理のためにネットワークへの参加機会を与えてくれる作用」であると仮定するとき、個人にとっての場の価値を計測することを考えたい。個人を表象する自己が相互作用的存在である以上、場の価値も空間・社会を参照しながら常に揺らぎ得る。このように揺らぐ価値とそれを取り巻く思考体系（価値観）を内観することは難しいため、ここでは価値そのものでなく価値の外生的な表現を観測することを考える。

ある思考の体系やプロセスを観測する方法論は主に心理学の分野で発達してきた。石原（2010）¹¹⁾は翻訳における翻訳者の思考プロセスのデータ取得法について検討する中で、内観法、思考発話法、回顧法についてそれぞれの特徴についてまとめている。これらの方法にはそれぞれ長所・短所があるが、どれも思考を言語化したものをデータとして得るという点で共通している。そこで、本稿では「語る」という行為に注目したい。

音声でも文字でも、語られたものは個人というフィルターを通して見る一つの世界に過ぎない。よって、語られたものは起こった「事実」を絶対的に表現するものではないということは、語りの対象が何であろうと変わることのない前提であろう。しかしここでは主観のプロセスを含む語りを客観性の欠如を理由に切り捨てるのではなく、むしろその特質に注目したい。野家（1996）¹²⁾が指摘するように、「客観的事実」は先験的に存在しているわけではなく、事実や行動が語るという行為によって時系列にコンテキスト上に配列されていくのである。このように行為ごとに揺らぐ「語られたもの」が、個人間及び個人内（自己間）で移ろいする価値観を表象している。さらに、後期 Wittgenstein 的な動的言語観に基づけば、野矢（2011）¹³⁾が言うように、語りを紡ぎ出す元となる論理空間（言語を用いた思考の可能領域）は経験と言語ゲーム（言語を用いて行われる相互作用）によって拡大するものであると理解できる。

以上のような議論に基づき、本稿では場における空間認知や社会関係への参加を通じて揺らぐ価値観の表現として、「語り」として表出する言語データを考える。

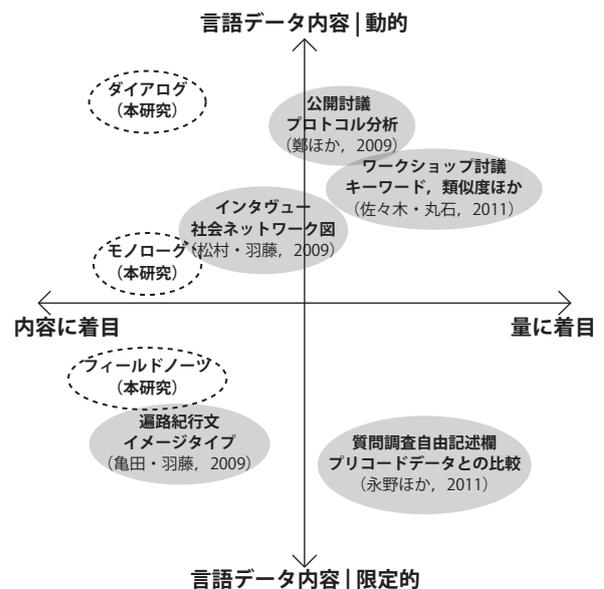


図-3 データの内容と分析の視点に着目した既往研究の整理と本稿の位置づけ。

(4) 本稿の目的

以下にここまでの議論を整理する。

- ①場（place in networks）を空間ネットワークに強く結びついた社会ネットワークとして定義する。
- ②場への参加動機として、アイデンティティの維持管理を仮定する。
- ③アイデンティティが維持管理され得るという考え方は、相互作用的自己観に基づいている。
- ④自己は場における相互作用（空間認知や他者との関わり）によって移ろう。
- ⑤ある自己を通して見た場の価値は、その自己によって発せられた言語データとして表現される。
- ⑥相互作用的自己を下敷きとした動的言語観の元では、この発せられる言語が、価値観の移ろいと共に変化する。

以上のような整理に基づき、本稿では場に対する語りの分析を通して、個人の場に対する価値観の変化について検討する。

3. 既往研究と調査の方針

(1) 都市・土木計画分野における言語データに着目した研究

都市・土木の計画分野において言語データを用いた研究では、そのデータは主に討議（録音記録、速記録）、質問調査の自由記述欄、インタビューから取得されている。Healey（1992）¹⁴⁾はHabermasがWittgensteinを参照しながら論じた相互主観的コミュニケーション論に基づき、環境計画のアプリ

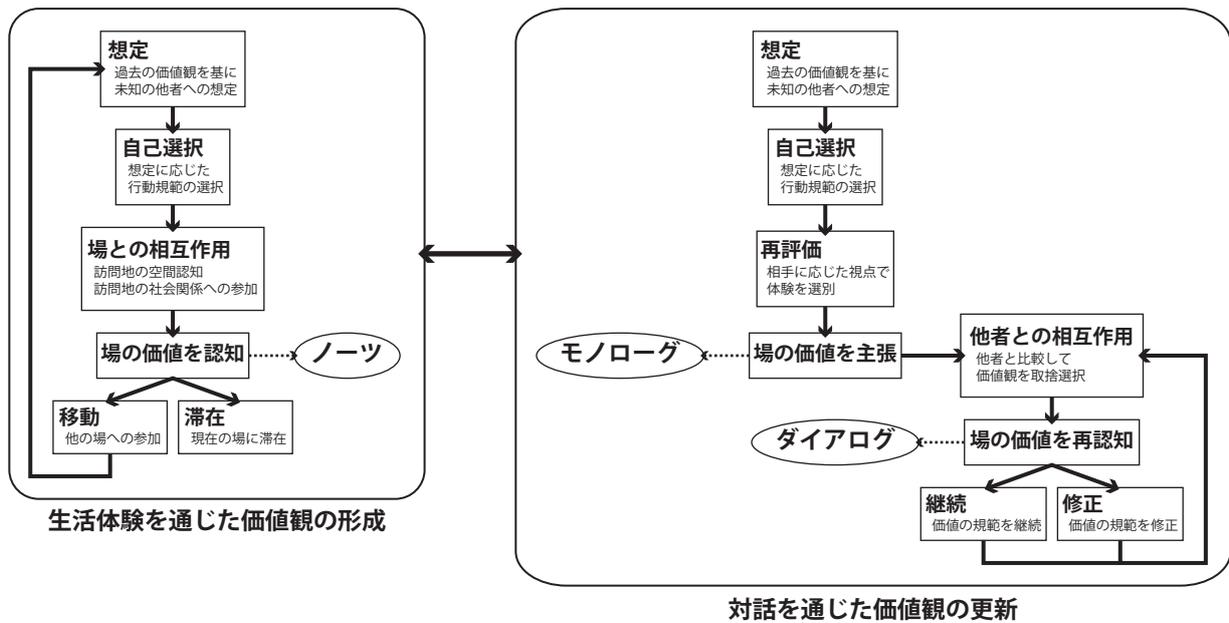


図-4 場に対する価値観の形成・更新.

ローチとして討議の可能性を示した。また、鄭ほか(2009)¹⁵⁾も Habermas のコミュニケーション論に言及しながら、公的討議の速記録から取得した言語データについてファセット分類とプロトコル分析を行い、討議の構造分析におけるこの方法の有効性を検討した。公開討議でなくワークショップでの討議の録音記録を対象としたものとしては、テキストマイニングを下敷きにキーワード抽出、討議内容の類似度の測定など、定量的な評価手法を検討した佐々木・丸石(2011)¹⁶⁾がある。また、永野ほか(2011)¹⁷⁾は質問調査の自由記述欄のデータを題材に出現頻度分析や共起ネットワーク分析を行い、さらにプリコードデータとの比較検証を行う事で自由記述欄における回答に対する形態素解析の適用有効性を示した。インタビュー録音記録に対して分析を行ったものには、地域住民に対して行った聞き取り調査のデータに社会ネットワーク図を描き起こすなど質的な分析を適用し、コミュニケーションの発展過程を明らかにした松村・羽藤(2009)¹⁸⁾がある。

(2) 周辺分野における言語データの取り扱い

語られたもの(narrative)に関心を寄せてきたのは、都市・土木計画が比較的良好に参照する心理学や社会学といった社会科学の学問ばかりではない。歴史学では、Yow(1994)¹⁹⁾が「録音されたデプス・インタビュー」と説明するオーラルヒストリー(oral history)が、公史や伝記の編纂に用いられてきた。これを都市計画分野に適用したものに、後藤ほか(2005)²⁰⁾がある。また、人類学では基本的にフィー

ルドワークで参与観察を行って書いたフィールドノート(field notes, 以下ノート)を元に分析を行う。しかし都市人類学においては対象の規模の大きさから、単純な参与観察の適用が難しい。多くの場合、対象を都市における小さなコミュニティに限定するか、限定された事象について取り扱うことで規模を小さく保っている。人類学的なフィールドワークは人文科学的手法の中でも特に視点の独自性に重きを置くためか、客観的・量的な解析と親和性の高い都市・土木計画の分野ではほとんど用いられてこなかった。ノートではないが、吉本(1965)²¹⁾の考え方を下敷きに類似のテキストである遍路紀行文に対してテキストマイニングを適用し、風景記述を整理した亀田・羽藤(2009)²²⁾がある。

(3) 本稿における調査の方針

本稿では、場に対する価値観が相互作用の中で変化していく過程として、

- ①日々の移動の中で様々な場を体験することにより行われる個人内での価値観の形成
- ②①で形成された価値観を他者と共有することにより行われる価値観の更新

という2段階を考え(図-4)、それぞれの段階で言語データを取得する。データ取得の形式については、前節までの既往研究を参考に以下の3種類を設定する。

D-1) ノーツ：生活の擬似的な再現として、複数の観察者に都市空間を移動しながら様々な日常の場について観察してもらい、ノートとして見たこと、感じ

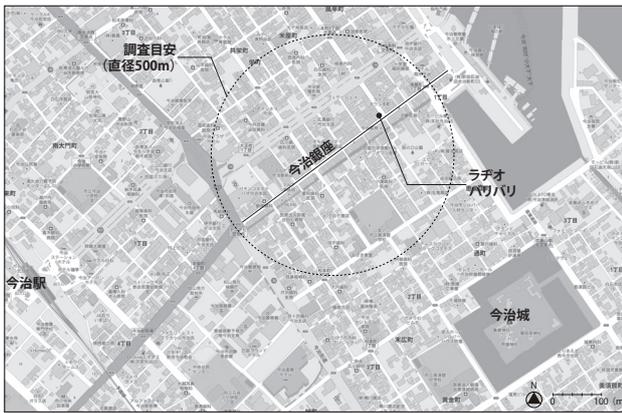


図-5 調査対象地域.

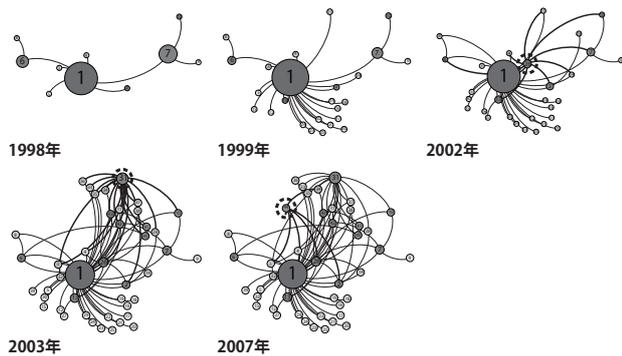


図-6 ラジオバリバリにおける社会ネットワークの発展：ノードは構成員（含ヴォランティア）を示す。ノードの大きさは媒介中心性に対応している。

たことを記述してもらおう。これをテキストデータとして得る。

D-2) モノログ：D-1) で行った場の体験についてひとり語りを口頭で行い、録音データを書き起こしてテキストデータを得る。

D-3) ダイアログ：D-2) を踏まえた上で対話を行い、録音データを書き起こしてテキストデータを得る。

D-2) 及び D-3) については、将来的に更なる他者との相互作用を観測するため、観察対象地域を聴取可能域として含むコミュニティ FM において放送することを想定し、30 分間のラジオ番組の形式で録音する。

分析においては、D-1) の分析により場との相互作用で変化する価値観を検討し、D-2) 及び D-3) の一体的な分析により他者との相互作用で変化する価値観について考察を加える。

4. 調査

(1) 対象地域

調査は愛媛県今治市の中心市街地（図-5）を対象に2012年4月に行った。

表-1 言語データ概要.

種類	データ形式	観察者分類	総語数	総異なり有意義語数
ノーツ	書面	学生A	3373	839
		学生B	1599	502
モノログ +ダイアログ	録音書き起こし	学生A	3290	777
		学生B	3138	734

■しまなみパティオ

辰の口公園からほど近いしまなみパティオ 1 階で、絵画の展覧が開かれていた。しまなみパティオは商店街に面した部分がガラス張りになっており、街路からでも中で行われていることが見える。外を通りかかったとき、20 代前半の女性（この方がアーティストだった）と 20 代後半の女性が室内のテーブルを囲んで談笑していたのが見えたため、気になって外から様子をうかがいながら入るかどうかを躊躇していた。するとアーティストの女性が「よかったら中で見ていってください」と言ってくれたので、私は「あ、ありがとうございます」と言って中に入った。これが 14 時すぎのことだった。

14:45 @ 文林堂

何を売っているのかもわからず入りづらい（おそらく文房具屋）店舗であったが、奥の方をのぞくと、70 前後のおばあちゃん 3 人とおじいちゃん 1 人に加えて 30 代くらいの男性がテーブルで談笑していた。窓際ではおばあちゃんが 1 人で座ってみかんを食べていた。

図-7 フィールドノーツの例.

今治市は古くから海上交通の要衝として繁栄していたが、1999 年に西瀬戸自動車道（通称：しまなみ海道）の開通によって広島県尾道市と市街同士が直結したため、四国本島と島嶼部を往来していたフェリー等の便数が減少している。港の旅客数減少に伴い、今治駅と港との間に位置する中心市街地の衰退、空洞化が進んでいる。

今回は特に、2010 年から 2011 年にかけて行った調査により社会ネットワークの動的特性（図-6）が確認できている今治コミュニティ放送株式会社（通称：FM ラジオバリバリ）のスタジオを含む商店街（通称：今治銀座）を中心とする直径約 500m の地域を対象とした。ただし、範囲に関してはあくまでも目安とし、厳密な制限を設けず、魅力的な場があれば範囲外でも観察して良いこととした。

また、本調査では経路の設定は行わず移動を自由に行ったが、決められた経路について類似の方法で都市のイメージや様相の記述を試みたものに、北・門内（2008）²³⁾ や柿元・羽藤（2010）²⁴⁾ がある。

(2) 観察者の属性

観察者は、都市計画を専攻する 20 代の大学生・大学院生 3 名とした。今回は取得したノーツのデータをもとにテキスト分析を行うため、ある程度の記述量の確保が前提となることを考慮して観察者にプローブ（probe、「探査機」の意）としての精度求めた結果、都市計画に造詣の深い者を選定した。3 名は全て東京在住で今治市や周辺地域に居住した経験はない。

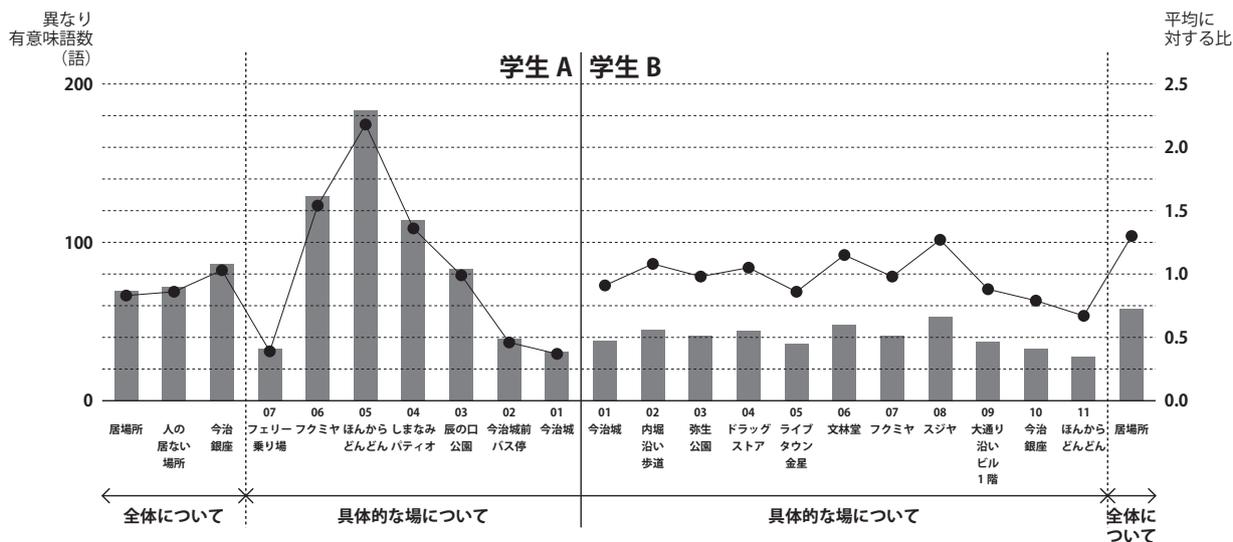


図-8 フィールドノートにおける語りの量と個人にとっての場の価値: [語りの量]=[異なり有意味語数](棒グラフ), [個人にとっての場の価値]=[場に対する語りの量]/[個人の語りの量の平均] (折れ線グラフ) と定義する。

(3) 調査内容

調査はクレイン・アグロシーノ (1994)²⁵⁾ 及びエマーソンほか (1998)²⁶⁾ を参考に、短期間ではあるが、人類学的フィールドワークとなるよう構成した。

a) ノーツの取得

まず到着後1時間半は、まちに溶け込む時間として観察者全員でまち歩きを行った。次の3時間は対象地域の参与観察に当て、個別行動で観察を行いながら各自メモを取った。観察終了後、メモを参考に個別にノーツをまとめた(図-7)。ノーツまとめにかかった時間は個人差があったが、概ね2-2.5時間程度であった。

なお全観察者がノーツを書いた経験がなかったため、前掲の2冊を参考にノーツの書き方について事前に簡単な説明を行った。説明した主な事柄は以下の通りである。

- ・「起こったこと」と「思ったこと」は分けて書くこと。
- ・レットル張りを安易に行わず、細かく記述をすること。
- ・時間、場所をメモすること。

b) モノログ、ダイアログの取得

帰京後、FM ラジオバリバリの番組として流すための音源を観察者のうち2名で録音した。番組は各人のモノログとその後のダイアログで構成した。

本稿では、ノーツ、モノログ、ダイアログの3種類が揃っている2名の大学院生(学生A:女性、学生B:男性)のデータを分析対象とした。

5. 分析

(1) 価値観の形成: ノーツ分析による場に対する中心的な概念の抽出

ノーツの分析を通して、個々の観察者にとっての場に対する価値及び中心的な概念を抽出した。

a) 手順

- ①場所名、時間などが見出しとして表記されている箇所を目安とし、各ノーツを場ごとの記述に区切る。
- ②場ごとに区切られたノーツに対して、KH Coder²⁷⁾を用いた形態素解析により、語数、語の抽出を行う。
- ③抽出語とその頻度を参考にしながら、再びノーツの記述を確認し、筆者の手作業で中心的な概念を抽出する。

ここで単純に出現が高頻度の語を中心概念としするのは、区切られた各ノーツごとの語数が比較的小ないため抽出語の頻度が概して低く、語の頻度によるキーワード抽出が難しいためである。この場合、複数の語にコードを割り当ててさらに機械的な解析を行うことも考えられるが、今回は記述の分量が少ないこともあり、解析結果を参考しながら手作業による概念抽出を行った。

b) 結果

まず、観察者ごとに各場に対する語りの量を図-8に示す。ここで、どのような文章にも出現するような助詞・助動詞等を除いた異なり語数を「異なり有意味語数」として定義し、これを場に対する語りの量として考える。またノーツにおいては学生Aと学生Bの語りの量に大きな差があるため(表-1)、個

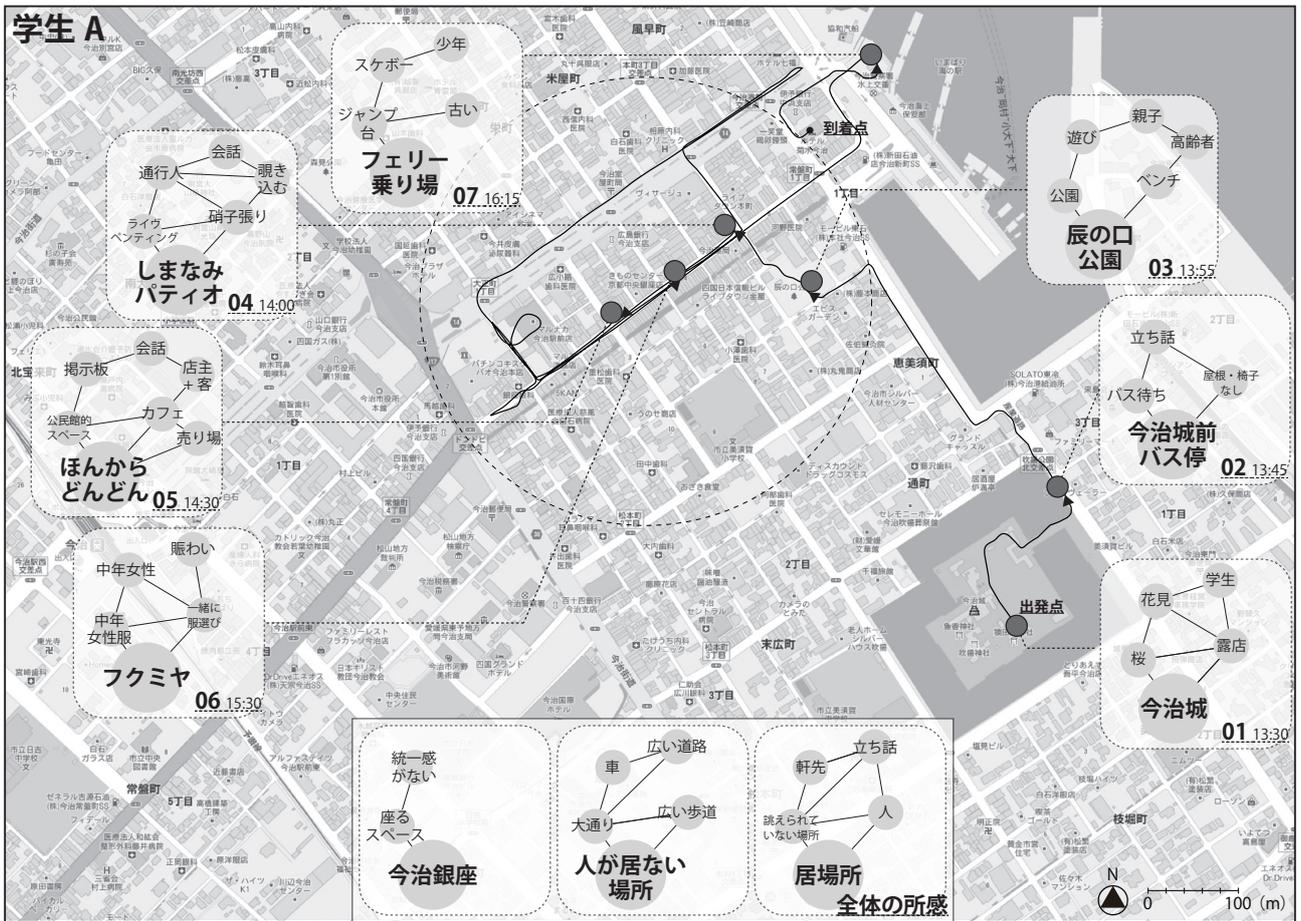


図-9 学生 A, 学生 B の移動軌跡と場に対する中心概念：番号は訪れた順番を示す。

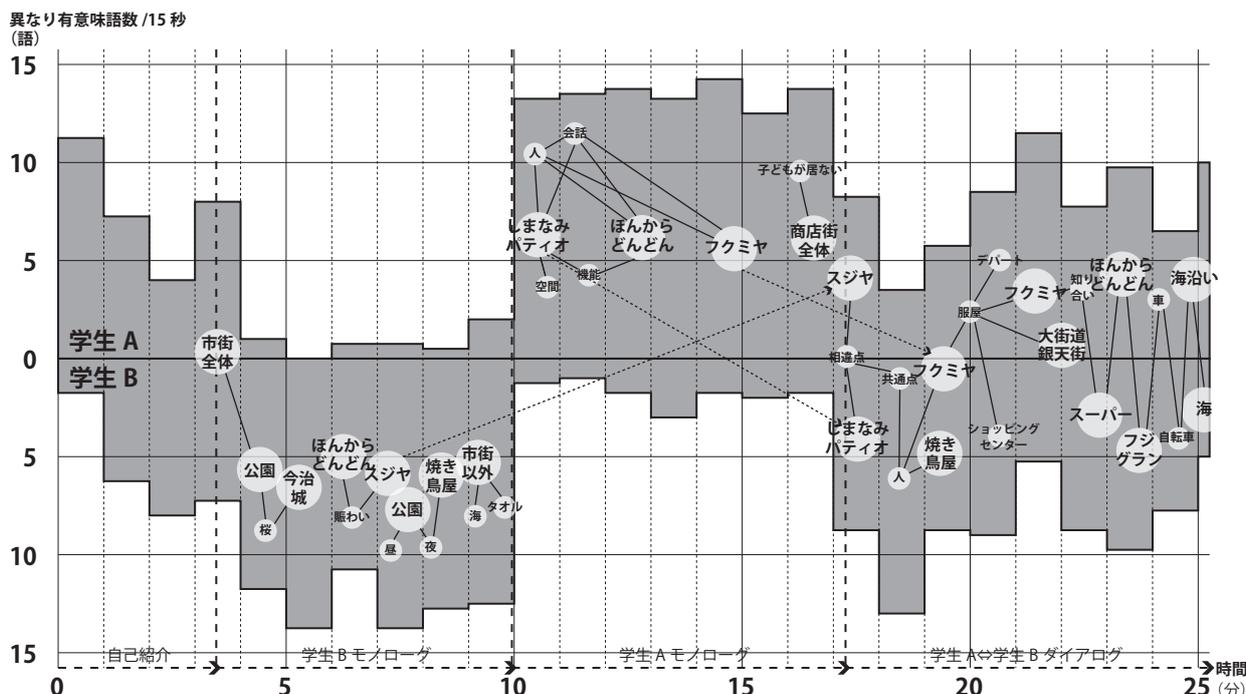


図-10 学生 A, 学生 B のモノローグ→ダイアログにおける語りの量と話題の変遷：モノローグの箇所でも話者でない学生に語りの量がある場合、相づちを示す。

人におけるある場の価値を考えるために、個人の語りの量の平均に対する比を算出した。

まず語りの量に関して、学生 A については全体の語りの量は比較的多いが場ごとの語りの量にばらつきがあるのに対し、学生 B については全体の語りの量は少ないが場ごとの語りの量は比較的一定であることがわかる。このように同期間の観察に対しても、ノーツにおいては語りの量や傾向に個人差があることが確認された。

さらに、各観察者の移動軌跡とノーツから抽出された中心的な概念を図-9 に示す。学生 A, 学生 B は後に挙げる 3 つの空間を除いては異なる空間について言及している。このことから、対象地域が同じであっても、その中で具体的にどのような場に価値を見いだすかということは個人ごとに異なることがわかる。

両学生が共に言及した空間は「今治城」、「ほんから」（地元の物産等を販売する場所）、「フクミヤ」（女性服店）の 3 つであるが、観察の時間帯が異なれば人間が移動し同じ空間でも社会関係が変化するという意味で、本研究の定義上は全く同じ「場」とは見なされないことがある。そこで特にほぼ同時刻に観察を行っている「今治城」についての中心概念を見てみると、学生 A, B ともに「桜」、「花見」等共通する事項に価値を見いだしていることがわかる。しかし学生 A にとって「今治城」の価値は他の場に対して 0.37 と低めであるのに対し、学生

B にとって「今治城」の価値は 0.91 と比較的高い。このように、同じ場（同空間 + 同社会関係）に接続しても、個人によって価値を見いだす事項や度合いが異なることが確認された。

(2) 価値観の更新：モノローグ→ダイアログ分析による中心概念の変遷

モノローグとダイアログの一体的な分析を通して、他者との相互作用における価値観の変遷について検討した。

a) 手順

- ① ラジオ番組の録音データから書き起こしたトランスクリプトを、1 分単位で区切り、さらに学生 A と学生 B の発言に分ける。
- ② 学生ごとに分割された分単位のトランスクリプトについて、KH Coder を用いた形態素解析により、語数、語の抽出を行う。
- ③ 抽出語とその頻度を参考に録音データを聞きながら、筆者の手作業で中心的な概念を抽出し、その時間を確認する。

b) 結果

語りの量と話題の変遷を図-10 に示す。モノローグ→ダイアログにおいてはノーツとは異なり、学生 A と学生 B の語りの量はそれほど差はないが、話題展開の傾向に差異が見られた。

学生 B は行動を時系列に回想しながら観察前のまち歩きから話し始めたが、やがて派生した話題から

連想的に展開を始め、時系列に回想することをやめた。例えば以下のような箇所が連想的な話題展開に該当する (5'06"-5'19" ころ)。

でもまあ公園すごいきれいに整備されてたんですけど、花見…ちょうど花…きれいに桜が咲いて、でもまあ、お花見でにぎわってたのは、今治、城、ですか。

この箇所においては、「公園」の話をしている際に「桜」に言及し、そこから「花見」を連想し、「花見」で賑わっていた場所として「今治城」へと話題を移した。また学生 B はモノローグにおいてノーツに記載しなかった話題（「市街以外」、「焼き鳥屋」）についても触れる等して比較的多くの具体的な場について言及し、自身の体験を網羅的に話そうとする傾向が見られた。

これに対し学生 A は、具体的な場からの連想ではなく、人間とそのインタラクションという抽象的な概念で結びつくような場を限定的に取り上げ、各場についてまとまった量の語りを行った。このような傾向は学生 A のノーツにも見られるが、これは主として学生 A が限定した場に対して人間同士のインタラクションを詳細に描写する傾向があることによる。例えば以下のような箇所がインタラクションの詳細な描写に該当する (10'54"-11'31" ころ、「/」は学生 B の相づちが入った箇所を示す)。

まず、しまなみパティオ、目に入って、そこで結構お客さんが居て、中でその…やってたのがアクリル、画の展示かなんかだったんですけど、/結構若い人がやってて、でまあお客さんと、なんかその…アーティストっぽい人がこうしゃべってるのが見えて、/ああなんか知り合いが来てるのかなあ？とか思ってこう、観察しようかなとか思って近づいてったら、/あ、ちょっとどうぞどうぞ入ってってくださいとか言われて、/入っていったら、入っていったら、作品を鑑賞しながらよく聞いてると、知り合いじゃないみたいでどうやら。

学生 A はこのように、体験を詳細に描写することで場の魅力を伝えようとしている。学生 B のモノローグが「思い出語り」型だとすれば、学生 A のモノローグは「プレゼンテーション」型であると言えるだろう。学生 A がモノローグで言及した具体的な場が、ノーツにおける語りの量上位 3 項目（「しまなみパティオ」、「ほんからどんどん」、「フクミヤ」）と一

致することからも、学生 A はモノローグを始める前から、場に対する価値の序列化を行い、論点を絞っていた可能性が示唆される。

以上のように、モノローグからは学生ごとに異なる価値主張のパターンが確認されたが、ダイアログにおいては双方のパターンを合わせたような形で話題が展開された。ダイアログにおいては最初双方が、自身は言及しなかったが相手が言及した具体的な場（「スジヤ」、「しまなみパティオ」）について、興味を示す語りを行った。その後、モノローグから確認された共通の価値観を学生 B が「人が居る風景」とまとめたことにより、話題が遷移した。この後しばらくは学生 A のモノローグ展開パターンと類似して、「人が居る風景」というトピックで具体的な場を複数挙げ合って会話し、次第に学生 B のモノローグ展開パターンと類似した連想型の話題展開がなされた。

このようにダイアログの展開パターンからは、異なる展開パターンのモノローグを交換することを通して、相手の展開パターンや話題と対比しながら価値の再認知が行われた可能性が示唆された。

6. まとめと今後の課題

(1) まとめ

本稿では、場と場の意味を取り巻く概念の整理を行った上で、場を place in networks として空間ネットワークと社会ネットワークで記述することを考えた。そしてこのような場に対する個人の価値観の変化を、場に対する語りとして表出する言語データから検討することを試みた。

実験的調査から取得された 3 種類のデータのうちノーツの分析からは、同期間、同対象地域の観察でも個人ごとに異なる場に価値を見いだす可能性があることが確認された。また同じ場に価値を見いだした場合にも、ある個人が相対的に高い価値を見いだした場が別の個人にとっても相対的に高い価値を見いだせる場であるとは限らないことが確認された。

また、モノローグの分析からは、他者に対して場の価値を主張する際のパターンが個人ごとに異なることが確認された。このモノローグを受けたダイアログでは各個人の話題展開のパターンを組み合わせる形で対話が進んだこと、お互いに相手のモノローグの内容を受け、共通点や差異について言及していることから、個人の価値観が他者との相互作用を通じて比較検討され得るとということが示唆された。

(2) 今後の課題

本研究の今後の課題としてはまず、調査分析手法

上の課題が挙げられる。特に今回実験的調査によって取得された3種類のデータは、取得に手間がかかるためデータ量が調査参加者数に依り、限定されることになる。さらに、モノログやダイアログによって相互作用を分析するには、相手を変える、参加人数を変える、何度か繰り返すなどの工夫が必要とされる。これについては、今回録音した番組を前述のコミュニティFMで放送し、対象地域の生活者である聴取者から感想のデータを得る、必要に応じてワークショップを行うなどして、今後も様々な形式でのデータ取得を行いたい。

また、本稿の分析では中心概念の抽出、話題の抽出の過程で機械的な形態素解析を援用したものの、最終的な決定には作業を行った者の解釈に自由度があった。今後はより多くのデータを処理するためにも、機械的な分析手法を適用することで改善が可能であろう。

参考文献

- 1) Schneckloth, L. H. and Shibley, R. G. : Placemaking: The art and practice of building communities, Wiley, 1995.
- 2) 三友奈々, 渡和由: 中心市街地における「プレイスメイキング」の試行, 日本デザイン学会研究発表大会概要集, Vol. 56, pp. 240-241, 2009.
- 3) 日本建築学会(編): まちの居場所: まちの居場所をみつける/つくる, 東洋書店, 2010.
- 4) 石本雄真: 居場所概念の普及及びその研究と課題, 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, Vol. 3, No. 1, pp. 93-100. 2009.
- 5) Cooley, C. H. : Human Nature and the Social Order, Charles Scribner's Sons, 1902.
- 6) Mead, G. H. : The Social Self, Journal of Philosophy, Psychology and Scientific Methods, Vol. 10, No. 14, pp. 374-380, 1913.
- 7) Blumer, H. : Symbolic Interactionism: Perspective and Method, Prentice-Hall. 1969.
- 8) Goffman, E. : The Presentation of Self in Everyday Life, Anchor Books, 1959.
- 9) 小坂国継: 西田哲学を読む1: 場所的場倫理と宗教的価値観, 大東出版社, 2008.
- 10) 石田准: アイデンティティ・ゲーム: 存在証明の社会学, 新評論, 1992.
- 11) 石原知英: 翻訳における言語意識: プロセスの記述とプロダクトの評価をめぐって, 広島大学大学院教育学研究科博士論文, 甲第5141号, 2010.
- 12) 野家啓一: 物語の哲学, 岩波書店, 1996.
- 13) 野矢茂樹: 語りえぬものを語る, 講談社, 2011.
- 14) Healey, P. : Planning through debate: The communicative turn in planning theory, Town Planning Review, Vol. 63, No. 2, pp. 143-162, 1992.
- 15) 鄭蝦榮, 小林潔司, 羽鳥剛史: ファセット分解と公

的討議のプロトコル分析, 土木計画学研究・講演集, Vol. 40, CD-ROM, 2009.

16) 佐々木邦明, 丸石浩一: テキストマイニングを用いたワークショップの討議内容の特徴把握と可視化に関する研究, 日本都市計画学会都市計画論文集, Vol. 46, No. 3, pp. 1039-1044, 2011.

17) 永野峻祐, 小根山裕之, 大口敬, 鹿田成則: 形態素解析を用いたアンケート調査自由記述欄の分析手法に関する研究~路面電車利用意識調査データを用いたケーススタディ~, 土木計画学研究・講演集, Vol. 43, CD-ROM, 2011.

18) 松村草也, 羽藤英二: コミュニケーションの発展過程が地域空間に対する意識に与える影響, 景観・デザイン研究講演集, Vol. 5, pp. 202-205, 2009.

19) Yow, V. R. : Recording Oral History: A Practical Guide for Social Scientists, SAGE Publications, 1994.

20) 後藤春彦, 佐久間康富, 田口太郎: まちづくりオーラル・ヒストリー: 「役に立つ過去」を活かし、「懐かしい未来」を描く, 水曜社, 2005.

21) 吉本隆明: 言語にとって美とはなにか, 勁草書房, 1965.

22) 亀田真宏, 羽藤英二: 空間-行動パターンと文章表現に着目した通路空間の景域分析, 景観・デザイン研究講演集, Vol. 5, pp. 151-158, 2009.

23) 北雄介, 門内輝行: 様相概念と実験方法: 経路歩行実験による都市の様相の記述と分析(その1), 日本建築学会学術講演梗概集, 2008.

24) 柿元淳子, 羽藤英二: ツアーによる空間イメージの共有化の可能性に関する研究, 土木計画学研究・講演集, Vol. 42, 2010.

25) クレイン J. G., アグロシーノ M. V. (江口信清訳): 人類学フィールドワーク入門, 昭和堂, 1994.

26) エマーソン R., フレッツ R., ショウ L. (佐藤郁哉, 好井裕明, 山田富秋訳): 方法としてのフィールドノート, 新曜社, 1998.

27) 樋口耕一: KH Coder, 2001-2012 (2012年5月6日閲覧, <http://khc.sourceforge.net/>).

(2012.5.7. 受付)

A STUDY ON THE VALUES AND THE MEANINGS OF PLACE IN NETWORKS

Yuko NAKAMURA and Eiji HATO

The idea of *place* design is attracting the interests of practitioners and researchers in the field of urban and infrastructure planning instead of focusing only on design of the built environment. This study would first define *place in networks* as a place that can be described in relation to spatial and social networks after the literature review of various conceptions of place and the meanings of place. Second, it focuses on the dynamic aspects of self based on the assumption that such a place works for personal identity maintenance and the concept of interactive and social self. This paper particularly deals with written and spoken protocol data obtained in three different forms through an experimental investigation.